

1 事業名
平成26年度 教育事業 「体験の風をおこそう」協賛事業
さんりく体験!探検ツアー 最初的一步 ～岩手横断370Km～

2 趣旨(事業の目的)
東日本大震災から3年が経過し、被災地も徐々にではあるが復興に向かっている。この中で、震災を「風化させない」「忘れない」ために、岩手県の将来を担う児童生徒たちが、被災地を訪問し、沿岸地域の人々と自然体験活動を通して触れ合う中で、被災地復興の現状を理解し、復興支援の一役を担う意識を高める。

3 期日
平成26年7月19日(土)～21日(月) 2泊3日

4 参加者
岩手県内の小学5年生から中学2年生27名(申込31人中諸事情によるキャンセル4名)

5 共催
岩手県立陸中海岸青少年の家

6 連携・協力
NPO法人 体験村・たのはたネットワーク
たろちゃん協同組合 理事長 箱石 英夫 氏
一般社団法人 宮古観光協会 学ぶ防災ガイド 元田 久美子 氏
シーカヤック三陸 メサ 代表 草山 雅之 氏
一般社団法人 ユナイテッドグリーン 代表理事 山田 周生 氏
やまだ夢プロジェクト
山田町

7 内容

(1) 日程

【第1日目 7月19日(土)】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
受付	開会式	バス移動			田野畑村 サツパ船体験				民泊体験				就寝		

【第2日目 7月20日(日)】

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
田野畑村	バス移動		浄土ヶ浜		震災遺構 田老観光ホテル 学ぶ防災ガイド		陸中海岸青少年の家				就寝				
	田老 仮設商店街 たろちゃんハウス								津波 の語り 部	キャンドル のつど い(感想 発表)					

【第3日目 7月21日(月)】

	9	10	11	12	13	14	15	16
陸中海岸青少年の家 シーカヤック体験				バス移動			閉会式	

(2) 指導者

- | | | | |
|---------------|---------|-----|----|
| ・国立岩手山青少年交流の家 | 次長 | 長代 | 健児 |
| ・国立岩手山青少年交流の家 | 企画指導専門職 | 中田 | 春輝 |
| ・国立岩手山青少年交流の家 | 企画指導専門職 | 中村 | 和宏 |
| ・国立岩手山青少年交流の家 | 事業推進係 | 中野 | 健二 |
| ・国立岩手山青少年交流の家 | 事業推進係 | 長谷川 | 祐太 |

(3) 企画のポイント

野外活動を通じて被災の状況や復興の様子を感じ取れるように、担当者は綿密な打ち合わせを行うために連携先を何度も訪問した他電話連絡を密に行った。

内容については、震災の恐ろしさよりも、復興に向かっていく前向きな状況に重点を置いた。

(4) 広報のポイント

滝沢市近隣の小中学校に約20,000部のガチャピン・ムックの画像を使用したチラシを配布するとともに、本施設のホームページを活用し、幅広く企画の周知を行った。「岩手日報」に参加者募集の記事も掲載され、定員を満たすと同時に(31名受入, 4名キャンセル)、岩手全県下に教育事業の周知をすることができた。

(5) 運営のポイント

2泊3日の間で370Kmのバス移動があることから、参加者の保護者全員に電話連絡を行い、プログラムの内容や体調管理等の不安がなく参加できるように聞き取りを行った。また、法人ボランティア4名もグループリーダーとして同行し、参加者の生活管理を行った。

プログラムに関しては、復興に奮闘している7団体と連携を行い、全てのプログラムにおいて復興の現状を体感できるような内容とした。

1日目は「さんりくを知る」というテーマのもと、サッパ船体験・民泊を行った。サッパ船体験は、船頭さんから三陸沿岸の地形・水産業・観光業・被災の状況・復興の状況を聞きながらの体験となった。下船後は、振り返りの時間を持ち互いの意見を交換した。民泊の受入家庭は参加者と同年代の子供がおり、田野畑村の基幹産業である水産業・酪農業・観光業に従事している家庭を選定した。

2日目は「さんりくを学ぶ」というテーマのもと、宮古市田老仮設商店街「たろちゃんハウス」の見学、高潮対策で作られ津波に耐えられず壊れた「防潮堤」と津波対策で作られた「防波堤」の違いを聞きながらの見学、津波の語り部からの話などを通じて東日本大震災の被災状況と復興の現状について理解を深めた。また、参加者が当日感じたことや体験したことを交流するために、キャンドルのつどいを行った。

3日目は「さんりくへ漕ぎ出す」というテーマのもと、シーカヤック体験を行った。津波で被災した浜辺において、復興に奮闘している地域の方々の協力のもと、海での野外活動を楽しむことができた。

8 成果とその普及

県立の青少年教育施設と共催することで、教育事業における参加者の指導方法の情報交換や教育事業の運営方法を普及することができた。また山田町役場は、震災後の町おこしの一つにシーカヤックの普及をあげており、内陸部から団体を受け入れるための良いモデルケースになったとの評価を得た。

参加者の教育事業全体に関する満足度・プログラムに関する満足度は共に100%であり、参加者からは、震災に関する学びに積極的に取り組みたいという気持ちが伺えた。「この教育事業に参加して復興に関する色々なことを知ることができました。来年も参加したいです。」「津波の恐ろしさを、後々に伝えていきたいと思いました。」「今回の体験をこれからの生活の中で活用していこうと思いました。」「復興はこれからが本番と言っていたので、頑張りたいし、自分も協力したいと思いました。」「津波の怖さを知りました。家族と詳しく話し合いたいと思っています。」等の感想が聞かれた。

9 今後の課題

所外での活動が中心となるために、職員の事前研修を充実させ、さらなる安全管理が必要である。

参加者に事前学習の機会があればさらに復興の現状に対する理解が深まると感じる。資料の事前送付や保護者同伴の説明会等を検討しても良いと考える。

被災後の町おこしの方向性(産業・観光・防災・食文化・野外活動など)を把握し、被災地のニーズがあり、復興の様子を感じ取れるプログラムの作成が必要であり、参加しやすい日程の再検討が必要である。2泊3日、小学校高学年の震災学習のモデルケース作成・普及を目指し取り組んでいきたい。



宮古市田老の防浪堤見学



陸中海岸青少年の家所長による津波の語り部



山田町浦の浜にてのシーカヤック体験